真宗研究　第六十二輯　抜刷
平成三十年一月三十日

永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について

――附『阿弥陀経要記』逸文補遺――

佐竹真城

永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について

――附『阿弥陀経要記』逸文補遺――

本願寺派　佐竹真城

はじめに

平安時代に活躍した永観（一〇三三～一一一一）は、一般に三論宗の学僧として認識されている。一方で、自ら「念仏宗」と称しており、[1] 日本浄土教史上においても、殊に源信（九四二～一〇一七）から法然（一一三三～一二一二）へと念仏思想が展開していく上での媒介的立場にあり、鎌倉浄土教の成立背景となった人師の一人と位置づけられている。[2]

永観の著作は、古来、『浄土依憑経論章疏目録』（以下、『長西録』と略称）によって、①『阿弥陀経要記』一巻、②『往生拾因』一巻、③『地想観文』一巻、④『常途念仏記』一巻、⑤『三時念仏記』一巻、⑥『決定往生行業文』一巻、⑦『往生講式』一巻、⑧『往生極楽讃』一巻、⑨『念仏讃』一巻、⑩『念仏勧進縁起』一巻の十書あったことが知られるが、現存しているのは②『往生拾因』と⑦『往生講式（往生講私記）』の二書のみで、殆どが散逸している。[3] しかし、散逸文献のなかには、他書に引用される逸文を集成して復元を試みられたものがある。それ

が、小論で扱う『阿弥陀経要記』（以下、『要記』と略称）である。

『要記』は、今日までに、末木文美士博士によって十二の刊本から二十四の逸文（逸文に類するものを含む）が報告された[4]後、新井俊夫氏によって若干の補遺が為されている[5]。しかし、両研究は逸文の蒐集に留まり、内容の検討にまでは及んでいない。

その後、直接に『要記』の逸文補遺を目的としたものではないが、能島覚氏によって、金沢文庫に蔵される『法事讃見聞集』（推定）古写本断簡から数文補塡できることが指摘された[6]。そして筆者も、金沢文庫所蔵の長西（一一八四～一二六六）撰『法事讃疑芥』や、長西門弟の入阿空寂（一二世紀後半～一三世紀前半）撰『法事讃要略記』が、『要記』の逸文を多く有することに気がついた。

そこで、末木博士と新井氏の逸文集成（以下、「先行逸文」と称す）に、能島氏の指摘する数文と『法事讃疑芥』等の写本に見られる逸文、さらには「先行逸文」で見落とされた諸刊本の文を加えて整理した結果、「先行逸文」の段階に比して、およそ倍となる逸文を蒐集することができた。

小論は、蒐集した諸文から窺える『要記』の特徴の一端を報告するものである。

一　『阿弥陀経要記』の概要

まず、『要記』の概要について判明していることを整理しておきたい。

三善為康（一〇四九～一一三九）の『拾遺往生伝』には、

阿弥陀経要記、往生拾因、各一巻自以筆削（ラテ）。念仏之輩皆以競写（テヒシテ）、以為（テスト）念仏宗（ト）云々。

（『仏全』巻一〇七・八六頁上下、傍線・訓点は筆者加筆）

とあり、『要記』は撰述されて以来、同じく永観撰述になる『往生拾因』とともに、念仏を実践する多くの人に書写されたことが知られる。三善為康は永観と同時代に生きた人物であるから、この伝承は信頼に値すると考えて大過なく、相当数の書写が行われたことは想像に難くない。にもかかわらず、今日に伝わらないのは不思議かつ遺憾である。

撰述時期について、『往生拾因』の中で、「具如(ニハシ)要記(ノ)」[7]と述べて具体的な説示を『要記』に譲っていることから、その下限は『往生拾因』が撰述された康和五（一一〇三）年以前と考えられている。

『要記』の全容は未だ詳らかでないが、『長西録』には、

同経［阿弥陀経］要記一巻卅三丁　（『仏全』巻一・三四四頁上、［　］内・傍線は筆者加筆）

とあり、三十三丁の一巻本であったことが知られる。およその分量を算出するならば、『長西録』では『要記』の直前に源信撰『阿弥陀経略記』を「二十五丁」[8]と伝えていることが参考となる。すなわち、『大正蔵』巻五十七所収の『阿弥陀経略記』は約一万四〇〇〇字であるから、『要記』は約一万九〇〇〇字を有する一書であったと推測できる。もちろん、版型などの条件が全く同一とも限らないため、多少の誤差は想定されるものの、強ち見当外れな数字でもないだろう。なお、「先行逸文」は約二五〇〇字であったが、「新出逸文」を加えることで六〇〇〇字を超えるところまで復元できた。前の数字から考えれば、全体のおよそ三分の一から四分の一にあたる分量となり、概略その内容を把握できるようになったといえる。

散逸時期について、末木博士は、

L［法海撰『阿弥陀経丁亥録』］に「永観ノ要記トイフ書アリテ今ハ伝ハラザルナリ」とあり（三一八頁。なお、Lにおける『要記』の引用はI［恵空撰『阿弥陀経義要』］からの孫引き）、Lの著わされた文政十年（一八二七）には散逸していたことが知られる。他方、Iには他書に見られない逸文が幾つかあり、直接実物を見

表1　大谷旭雄氏整理
『要記』引用経論と回数

引用経論名	引用数
『平等覚経』	一
『称讃浄土経』	五
『遺教経』	一
『悲華経』	一
『菩薩処胎経』	一
『摂大乗論』	一
僧肇撰『注維摩経』	一
伝智顗撰『阿弥陀経義記』	一
吉蔵撰『法華義疏』	二
懐感撰『群疑論』	二
元暁撰『阿弥陀経疏』	?
源信撰『阿弥陀経略記』	四
智光撰『無量寿経論釈』	一

ていたと思われる。Ⅰの刊行は宝永八年（一七一一）であるから、その頃から文政までの間に失われたと考えられる。

（末木博士前掲稿三五〇頁、［　］内・傍線は筆者加筆）

と、宝永八年から文政十年までのおよそ一一〇年の間に散逸したとの見解を示されている。

内容について、「先行逸文」時点の研究で明らかにされているのは、①引用経論の概要[9]と、②『大経』・『観経』における一念・十念の説示を、与奪義を用いて理解する点[10]が挙げられる。殊に①について、先行研究で明らかにされた『要記』の引用経論は**表1**の如く纏めることができ、これらの引用経論から窺える特筆すべき点として、❶羅什訳『阿弥陀経』の異訳である玄奘訳『称讃浄土経』を多く引用して対照しながら意味を的確に取ろうとしている点と、❷吉蔵（五四九～六二三）などの三論系典籍が引用されることより三論系浄土教者としての教学的基盤を看取できる点という、二つの特徴が指摘されている。

二　「新出逸文」から先行研究に対して言及できること

前項にて、先行研究で明らかにされている『要記』の概要を確認した。本項では、「新出逸文」の検出により判明した点をもって、先行研究を再検討したい。

（一）散逸時期

「新出逸文」を見ると、末木博士の指摘する『阿弥陀経義要』（以下、『義要』と略称）のみが有する逸文はなくなった。さらに対校結果（小論の附録を参照）を見ると、『義要』における『要記』引文は、概ね尭慧（～一三九五）撰『阿弥陀経私集抄』（以下、『私集抄』と略称）と符合することがわかった。この結果を勘案すると、『私集抄』と重複しない逸文についても、必ずしも今回蒐集した文献を参照していたとは限らないものの、当時恵空の手元に置かれていた何れかの典籍に引用されたものを孫引きしている可能性は高いだろう。よって、散逸時期の上限はさらに早い段階を想定できるというのが筆者の見解である。なお、金沢文庫には『法事讃下管見鈔』[11]なる二巻本の古写本が蔵されているが、筆者が一瞥したところでは、『要記』の引用は一度もない。本書の撰述年は不明であるが、撰者は長西の孫弟子にあたる導空（～一三一三～）とされ、導空の師にあたる道教（一二〇九～一二八七）撰述と推定される『法事讃見聞集』には『要記』が引用されている点に鑑みれば、孫引きすらない点は疑問である。この点から、『要記』は一三〇〇年代の鎌倉浄光明寺周辺では、すでに散逸していたと推測することもできる。現状で明確な年時を示すことはできないが、上記の事実は『要記』の散逸時期を考える上で、一つの可能性を示唆するものと見ることができよう。

（二）引用経論

「新出逸文」を踏まえると、『要記』所引の経論と回数を**表2**の如く纏めることができる。[12]筆者が確認した結果と先行研究を対比すると、当然ながら引用回数や所引経論に相異のあることがわかる。それらの相異のなか、回数が減った、あるいは確認できなかった経論については、数え方の相異、もしくは実際には引文中の引文であるのを永

表2　筆者整理『要記』引用経論と回数

引用経論名	実引用数（想定数）
『無量寿経』	三
『大阿弥陀経』	一
『平等覚経』	一
『称讃浄土経』	九
『涅槃経』	一
『遺教経』	一
『悲華経』	一
『菩薩処胎経』	一
『浄土論』	三
『大智度論』	一（三）
『摂大乗論』	一
天台『阿弥陀経義記』	二
吉蔵撰『法華義疏』	四
吉蔵撰『法華玄論』	一
吉蔵撰『金剛般若疏』	二
吉蔵撰『勝鬘宝崛』	一
慈恩撰『阿弥陀経通賛疏』	一（二）
慈恩撰『阿弥陀経疏』	（一）
懐感撰『群疑論』	一
普光撰『倶舎論記』	二
智円撰『西明疏』	一
智光撰『無量寿経論釈』	一
源信撰『阿弥陀経略記』	一（二）

観が直接引用したものと誤解したことによると推察する。また、先行研究にて特徴と指摘された『称讃浄土経』や吉蔵著作の引用が多い点については、前者が九回、後者も四書計八回と、更に多くの引用を確認することができ、前の❶❷の両見解を補強する結果となった。

三　「新出逸文」に見る『要記』の特徴（一）
――菩提心理解――

これより以下は、「新出逸文」を通して、従来知られていなかった『要記』の特徴の一端を見ていきたい。

永観は『往生講式』において、冒頭の第一門に「発菩提心門」を立てていることから、菩提心を発すことを重要視していたと考えられており、[13] その『往生講式』に示される菩提心とは、「願生心」あるいは「厭離心」と定義される。[14] また、『往生拾因』にも菩提心理解が述べられているが、『往生拾因』では密教の観法の影響を受けた「衆生本有の浄菩提心」と定義されており、[15] 著作間でニュアンスの相異はあるものの、永観の菩提心理解は、概略上記の如く知られている。

そして、「新出逸文」にも菩提心に関する言及を確認できる。それは次の如くである。[16]

是故要記云、実雖二大菩提心浄土正因一、末代遇夫輒以難レ発。縦雖二希発一遇レ縁使レ退。故仏願説二浄土荘厳一、令二彼願楽一生二大乗土一発二菩提心一。若不レ爾者、何得二発心一。豈不二如来大悲願力一、斯実発心之方便、末代之要行也。

（Ⓑ下21右、傍線・訓点は筆者加筆）

ここで注目すべきは、「末代の愚夫は簡単に菩提心を発すことができない。もし希に発せる人がいたとしても、縁によっては退失してしまう」との説示と、「それを見越して仏は誓願に浄土の荘厳を説き示して往生を願わせ、大乗の土たる浄土に往生して菩提心を発させる。そうでなければ、どうして菩提心を発すことができるだろうか」との理解が示される点である。すなわち、末世の衆生では菩提心を発せず、穢土において発すのはあくまで浄土願生の心であるとし、浄土往生によって環境が調うことで、菩提心を発すことができると示しているのである。これは、すでに解明されている永観の他著作における理解とは異なるものであり、永観思想の新たな一面が窺えよう。

そして、如上の菩提心理解からは、法然との接点が見えてくる。すなわち『逆修説法』において、

今浄土宗菩提心者、先往二生浄土一、欲レ度二一切衆生一、断二一切煩悩一、悟二一切法門一、証中無上菩提一之心也。

（『昭法全』二四〇頁、傍線・訓点は筆者加筆）

と示される「浄土宗の菩提心」に通じる点を看取できよう。法然の菩提心理解は、同じく『逆修説法』において、

善導御意、先生二浄土一満二菩薩大悲願行一之後、還入二生死一欲三遍度二衆生一、此心名二菩提心一云々。

（『昭法全』二四二頁、傍線・訓点は筆者加筆）

と述べているから、善導（六一三～六八一）の説示に基づくものと考えられる。その善導義とは、「散善義」上品下生釈に、

唯発二一念一厭レ苦、楽レ生二諸仏境界一、速満二菩薩大悲願行一、還二入生死一、普度中衆生上。故名二発菩提心一也。

と示されるものである。

周知のように、永観は早い段階で善導「散善義」を受容[17]して称名念仏を勧め、念仏思想において法然への影響という点でも注目される人師であるが[18]、「新出逸文」の検出により、菩提心理解においても善導の説示にいち早く注目し、善導と法然の間に媒介的役割を果たした可能性を考えることができよう[19]。

（『聖典全書』巻一・七七七頁、傍線は筆者加筆）

四　「新出逸文」に見る『要記』の特徴（二）――吉蔵の影響――

『要記』は三論系諸師の著作、ひいては吉蔵の著作が多く引用されることはすでに述べたが、文献名を示して直接に引用の形態を取らない文言であっても、吉蔵著作の影響下に執筆されていることが明らかとなった。それは以下に対照した如くである（傍線・ゴシック処理は、便宜上筆者が加えた）。

(1)『要記』⑧

観云、内秘菩薩外現声聞位高可崇故呼為長老也又云摂大乗論明身子是化上　（Ⓐ二11左）

吉蔵撰『金剛般若疏』

又云空生即従生時受称其人内秘菩薩行外現声聞位高可崇故呼為長老也　（『大正蔵』巻三三・一〇〇頁上）

或有経云此是化人摂大乗論明身子是化人善吉猶為其例　（『大正蔵』巻三三・一〇〇頁上）

(2)『要記』⑨

観、羅睺羅者此云覆障三蔵云本是阿修羅名若具翻之応云障月仏子又云宮生略抄文　（Ⓐ二18右）

吉蔵撰『法華義疏』

羅睺羅者此云覆障以六年在胎為胎所障故云覆障三蔵云本是阿修羅名此阿修羅能以手障月若具翻之応云障月仏

(3)『要記』⑩

観云、賓頭盧頗羅堕者**性**頗羅堕俗也真諦三蔵云翻為利根仙人六**性**波羅門中一**性**也已上　（Ⓐ二19右20左）

子所以作此名者是借喩為目仏自説我正法如月此児障月欲出家学道有児則成障也雖復是障而如来能捨之仏自説過去世羅睺羅数数為道作障我亦数数能捨之又名宮生

（『大正蔵』巻三四・四六〇頁中～下）

吉蔵撰『法華義疏』

初明道名俗姓同也日月灯明道名也**姓**頗羅堕俗姓也真諦三蔵云翻為利根仙人六**姓**波羅門中一**姓**也又翻為弁才又翻為満満正也　（『大正蔵』巻三四・四七九頁下）

(4)『要記』⑪

観云、迦留陀夷者迦留此翻時陀夷名之為起十八部疏云迦留者**累**陀夷者上謂悉達太子宮時師也文　（Ⓐ二20左）

吉蔵撰『法華義疏』

迦留陀夷者迦留此翻時陀夷名之為起十八部疏云迦留者**黒**陀夷者上謂悉達太子在宮時師也

（『大正蔵』巻三四・五八〇頁中）

(5)『要記』⑫

観云、阿**㝹**楼馱者此翻為如意亦云无貧西明疏亦加二人謂椶阿迦与難達羅難□阿也文　（Ⓐ二22右左）

吉蔵撰『法華義疏』

阿**菟**楼馱者翻為如意亦云無貧以過去一食施辟支仏十五劫中天上人中受於福楽最後得羅漢常得如意無有貧窮是甘露飯王之子也　（『大正蔵』巻三四・四五九頁下）

(6)『要記』⑬

観云、以衆生常有諸苦是故大士恒**順**済抜故言常精進文　（Ⓐ二24右）

吉蔵撰『法華義疏』

常精進者以衆生常有諸苦是故大士恒**須**済抜故言常精進也　（『大正蔵』巻三四・四六三頁中）

(1)では、序文の「長老」を釈するにあたり、吉蔵撰『金剛般若疏』の所説に依拠していることがわかる。(2)では、仏弟子の「羅睺羅」を釈するにあたり、吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることは明白である。ただし、永観自身「略抄」と記していることから、本来は書名を挙げて引用したものと考えるべきかもしれない。(3)では、仏弟子の「賓頭盧頗羅堕」を釈するにあたり、引文も含めた主要部分をほぼ吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。「性」⇕「姓」の相異については、音・意味ともに同じもので相互に用いられるものであるから、相異と見なくとも大過ないだろう。(4)では、仏弟子の「迦留陀夷」を釈するにあたり、吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。「累」⇕「黒」の相異については、音・意味は全く異なるものの、くずした字体は相似するところがあり、写伝過程での写誤と見て大過ないと考える。(5)では、仏弟子の「阿冤楼馱」を釈するにあたり、後半は智円撰『西明疏』からの引用であるが、前半を吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。相異箇所である「冤」⇕「菟」については、異体字関係あるいは写誤と見ることができるため、実質は全文一致といえよう。(6)では、「常精進菩薩」を釈するにあたり、吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。相異箇所については、対校本では完全一致しており、今回底本に採用した典籍の写誤および単純省略と考えられる。

如上、『要記』では特に基礎的・通仏教的な部分において、吉蔵著作の影響下に論じられていることを指摘できる。書名を挙げて引用する例も合わせると、『要記』の撰述にあたっては、吉蔵教学に比重が置かれていたことが知られるのである。

ところで近年、舎奈田博士によって、永観を東大寺において真言と顕教を兼学していた真言宗僧侶と位置づける見解が提示されている。[20] その論拠とされるのが、次の四点である。

Ⓘ生涯や関連する寺院・人師に真言宗、真言僧の影響が強い

Ⓘ念仏行のみならず密教的な修行を行っていた

Ⅲ『往生拾因』において阿字観の影響が見られ、即身成仏と同じ構造を用い、さらに密教経典・儀軌・空海の著作を引用している

Ⅳ平安中後期南都寺院における歴史的背景

しかしながら、明確に「真言宗僧侶」と断定することは一概に首肯し難い。すなわち、諸宗を兼学することは南都仏教の伝統ともいえるものであり、ましてや永観は三論・真言兼学の東大寺東南院に住したことから、三論とともに真言も学んでいた、あるいは禅林寺の系譜が真言宗に連なるものであるから密教の影響を受けているとする点に異論はない。しかし、それがそのまま「真言を主としていた」という論理は、いささか飛躍が過ぎるのではないだろうか。そして、理由Ⅲとして指摘されている引用経論については、何も永観に限ったことではない。今回指摘した『要記』における吉蔵著作との一致は、その問題に一石を投じ得るものであると考える。すなわち、『要記』における吉蔵著作との一致は、特に浄土思想には直接関係することのない基礎的・通仏教的な解釈に集中していた。それも、引用文としてではなく、永観自身の言葉として記された箇所での一致である。このことは、とりもなおさず永観の基本スタンスが三論宗、ひいては吉蔵教学にあったと考えられる一証左といえるだろう。[21] もしくは、舎奈田博士の指摘通り『往生拾因』撰述時には真言僧であったとしても、『要記』に限って見れば、三論僧の立場から撰述されたものと考えられるのである。

おわりに

小論では、永観の散逸文献である『要記』の逸文をもとに、現状で知り得る特徴の一端として、菩提心理解において善導と法然の間に媒介的役割を果たした可能性と、基礎的・通仏教的な理解が三論宗大成者の吉蔵に依拠して

いる点を論じた。

これらの特徴を勘案すると、『要記』は、自身が『往生拾因』で標榜する「念仏宗」の立場、または吉蔵の理解を中心とした三論僧の立場から論じたものと窺うことができ、平安期における南都浄土教を解明するための貴重な一書であるといえる。

また、上記の如き『要記』の特徴を踏まえて永観という一人師に注目した時、晩年に撰述した『往生拾因』に密教の影響が顕著なことから真言僧との指摘がある点や、今回論じた菩提心理解においても著作間で説相が異なっていたことに鑑みれば、思想変遷があったと考えることができる。したがって、永観の教学を総合的に窺う上でも、『要記』は示唆に富んだ重要な典籍であるといえよう。

小論で言及することが叶わなかった『要記』逸文に対する考究と、永観の現存著作全体を通して総合的に教学を研究していくことは、さらなる逸文補遺とともに今後の課題としたい。

註

(1) 永観の著作として知られる『往生拾因』の撰号には、「念仏宗永観集」(『大正蔵』巻八四・九一頁上)と記される。

(2) 普賢晃壽稿「日本浄土教の展開と親鸞教学」(『真宗学』巻九九・一〇〇、一八頁[一九九九年])

(3) 昭和の末に京都府勝林院から『三時念仏観門式』なる一書が検出され、永観の制作であると考えられている。詳細は大谷旭雄稿「永観作『三時念仏観門式』について」(『坪井俊映博士頌寿記念 仏教文化論攷』所収[一九八四年])、山田昭全稿「永観作『三時念仏観門式』をめぐって――報告並びに翻刻――」(『大久保良順先生傘寿記念論文集 仏教文化の展開』所収[一九九四年])を参照されたい。

(4) 「永観『阿弥陀経要記』逸文について」(『印仏』巻二五―一[一九七六年])

(5) 「永観の『阿弥陀経要記』について」(『仏教論叢』巻二一[一九七七年])

(6) 「称名寺聖教『阿弥陀経抄』について」(『金沢文庫研究』巻三二三[二〇〇九年])

(7)『大正蔵』巻八四・一〇一頁中
(8)『仏全』巻一・三四四頁上
(9)大谷旭雄他著『浄土仏教の思想』巻七・八八～八九頁（一九九三年）。**表1**は大谷氏の見解に基づいたものであるが、大谷氏は「～などがある」と表現している部分もあるので、参考程度に理解しておくべきだろう。なお、元暁撰『阿弥陀経疏』の引用回数を「?」としたのは、大谷氏が明示していないことによる。
(10)大谷氏前掲書一五一～一五二頁、同氏著『法然浄土教とその周縁』巻乾・一一三～一一四頁（二〇〇六年）
(11)【請求番号】九二―九―一・二。二巻本であるが、下巻は極一部のみ残存。
(12)「実引用数」は逸文で直接引用が確認できる数、「(想定数)」は逸文に類するものに引用があり、「永観同之」などとある場合を含めた数である。ただし、引用経論に複数の可能性を有する場合は除外した。また、出拠原文に当該文が確認できない場合でも計上したが、「有云」「有疏云」などは除外した。
(13)舎奈田智宏稿「永観の菩提心思想について」(『豊山教学大会紀要』巻三五〔二〇〇七年〕) 一九二頁
(14)大谷旭雄稿「永観『往生講式』の撰時と往生思想」(『浄土教論集』〔一九九二年〕)、梯實圓稿「日本浄土教に於ける菩提心釈の展開」(『浄土教学の諸問題』巻上〔一九九八年〕)、笹田教彰稿「平安浄土教の一考察――発菩提心をめぐって――」(『浄土学仏教学論叢』〔二〇〇四年〕) などの諸研究による。
(15)舎奈田博士前掲稿一九三頁参照。なお、田上太秀博士は「菩提心は菩提を求める心であるが、その求められる菩提と菩提を求める心とは本来一つであるという考えを打ち出し、菩提心の空性を説きだした」(『菩提心の研究』一九頁〔一九九〇年〕) と述べているが、舎奈田博士はそれを承けて、永観においては『往生講式』が初発心、『往生拾因』が悟りそのものとしての意味を持つと述べている。また、両書においては、『往生講式』が最初に、『往生拾因』では第九章にあることが、それを端的に示しているとの見解を述べている (前掲稿一九八頁、註(2)参照)。
(16)小論における『要記』引用時の出拠は、小論附録の「逸文補遺」を参照されたい。
(17)『往生拾因』の第十因 (『大正蔵』巻八四・一〇〇頁下) に「散善義」就行立信釈が取意引用されており、称名念仏思想を展開していることは有名である。永観に先行して「散善義」を引用した典籍として、たとえば、藤堂恭俊博士が「源隆國1004―1077の編纂にかかる『安養集』全十巻中には『散善義』を十三回に亘って引用し、さらに『安養集』と密接な関係をもつと言われている『安養抄』〔良慶作〕にもこれを三回引用するに至っている。

永観はそうした傾向を継承するかのように『散善義』に注目し、その文を引用しているのである」（「禅林寺永観律師の浄土教思想」、『日本仏教学会年報』巻二二・三〇頁［一九五七年］）と述べるように、『安養集』・『安養抄』が知られている。

(18) 特に近年、田代俊孝博士は、『選択集』の説示と『往生拾因』の説示とが近似していることから、法然が南都浄土教を手がかりにして善導浄土教に出遇ったとの見解を示されている（「法然と南都浄土教――善導『観経疏』の受容をめぐって――」、『親鸞教学の課題と論究』二〇～三三頁［二〇一六年］）。

(19) 永観に先行して「散善義」を引用した文献として、『安養集』と『安養抄』があることは註(17)に示した如くであるが、『安養集』について大谷氏は、「本書は論疏ではなく、項目別に浄土往生に関する経論の説示を集めた論題集であって、これが具体的にどれほど後世に影響したかは確かめ難い」（前掲書［一九九三年］一五九頁）と述べ、新井氏は『安養抄』の編者と伝えられる教月房良慶の生没年を、『三井続灯記』の記述によって一一一七～一二〇二と推定しており（新井俊夫稿「安養抄について」、『大正大学大学院研究論集』巻三・九～一一頁［一九七九年］）、新井氏によれば『安養抄』は永観より後の成立となる。ただし、新井氏の見解は『長西録』に「安養抄六巻　良慶教月房、依白川院仰造之」（『仏全』巻一・三四六頁下）と伝えられる編者名のみに注目したものであり、佐藤哲英博士は、『長西録』の記事は年代上の矛盾を含んでいることが判明した。すなわち白河院の院生期間は一〇八七～一一二九年で、そのころ良慶はまだ少年時代にすぎないからである。そこで『安養抄』の作者を、三井寺の良慶（一一一八～一二〇二）とする説は許されなくなり、同じ良慶は良慶であっても、『安養抄』の作者としては別人の良慶を求めねば解決出来ないことになった」（『叡山浄土教の研究』研究編、二四五～二四六頁［一九七九年］）と指摘した上で、「東大寺図書館蔵の古写本にはどこにも編者の名をしるしていないので、現在のところ編者未詳の書としておいた方が無難かもしれない」（前掲書二五八頁）と述べている。そして、近年では、能島氏が「この細注自体が「後白河院」の誤りである可能性もある」（『浄土教典籍目録』二五六頁「安養抄」項［二〇一一年］）と述べるなど、佐藤博士の見解に異義を唱えている。如上、『安養抄』は種々の検討課題を残しており、成立時期についても現状では確定できない。しかしながら、成立が永観以前・以後の何れであったとしても、梯信暁博士が「11世紀には、貴族社会に阿弥陀仏信仰が浸透し、論議法会の場に浄土教の諸問題が登場することとなる。…（中略）…当時、浄土教教理の担い手は天台宗であった。10世紀以来の研究成果を存分に発揮して、論議法会において指導的地位を占めたことが推察される。論議に備える手引書としては、『往生要集』を

はじめとする天台宗の浄土教典籍が用いられたことであろう。しかし次第に、『往生要集』だけでは論議に対応しきれないほど、浄土教教理の研究が進展してきたことが考えられる。そのような状況下に成立したのが『安養集』『安養抄』『浄土厳飾抄』という一連の文献である」（『インド・中国・朝鮮・日本 浄土教思想史』一一〇～一一一頁〔二〇一二年〕）と述べているように、『安養抄』が天台宗を中心とした論議法会の手引書として制作されたものであることに加え、先述の『安養集』に関する大谷氏による指摘も相まって、後世への影響はそれほど大きくないと推察する。その点、永観撰述書は前述の『拾遺往生伝』に記される如く反響の大きかったことが知られるから、永観は日本における実質的な「散善義」引用の先駆的存在と考えて大過ないだろう。特に、本項で示した「散善義」上品下生釈は、『安養集』（梯信暁著『宇治大納言源隆国編 安養集――本文と研究――』〔一九九三年〕を参照）、『安養抄』（『大正蔵』巻八四を参照）ともに引用がない。また、浄土で菩提心を発すという理解の類例は他に殆ど確認できず、管見の限り、善導以外では憬興（八世紀頃）の『無量寿経連義述文賛』（以下、『述文賛』と略称）に、「而言レ当レ発菩提心者、欲レ顕生レ彼必発大心」（『大正蔵』巻三七・一五八頁下、傍線・訓点は筆者加筆）と示されるのを確認できるのみである。したがって、永観が浄土で菩提心を発すという発想を持つに至った根拠は、自ずと「散善義」もしくは『述文賛』に絞られてこよう。しかしながら、『述文賛』は『往生要集』に引用されることから日本でも早い段階で注目されたことが窺えるものの、一瞥したところでは、『述文賛』の当該文を初めて引用したのは『安養集』（梯博士前掲書七九頁）である。また、『安養抄』にも二度の引用（『大正蔵』巻八四・一三八頁上、一六三頁中）を確認できるが、その他の人師に『述文賛』当該文の引用は確認できない。前述の如く、後世への影響という観点からは、『安養集』・『安養抄』は未知の部分が多い上、天台宗を中心に用いられていた可能性が高いことから、現時点では永観が両書を通じて影響を受けたとは考え難い。さらに、永観の現存著作上に憬興からの引用を確認できないことから、「散善義」より影響を受けた説示と見るのが隠当であり、『要記』が初めて注目したものと考えられるのである。ちなみに、日本における『観経疏』の流伝と永観の受容については、大谷氏前掲書（一九九三年）一五七～一六一頁や田代博士前掲稿に詳しいので参照されたい。

(20) 舎奈田智宏稿「真言僧としての永観」（『密教学研究』巻四三〔二〇一一年〕）。なお、舎奈田博士以前にも永観の一部思想に密教的影響を指摘するものは複数ある。詳細は舎奈田博士の論攷の註(6)を参照されたい。なお、舎奈田博士は前掲稿（二〇〇七年）一九五頁でも「永観自身は真言僧」と述べているが、同稿の註(26)を見る限り、

前出の四点に類する内容を理由として「真言宗僧として捉えることも十分可能である」（二〇二頁）と、可能性の範疇で述べるに留まっていた。

(21) 舎奈田博士は前掲稿（二〇〇七年）の註(26)前半部で、「実際のところ永観は諸宗兼学の僧であり、自身で「念仏宗永観」とも自称しているなど現代の基準において何宗の僧と規定するのは難しい」（二〇一～二〇二頁）と述べている。筆者は基本的にこの見解に同意である。永観を取り巻く環境からは、三論・真言の両様を看取できる。それならば、諸宗兼学の学風を尊重すべきで、著作上で比重を置いている立ち位置ならばともかく、「何宗の僧」と限定することは、その人師を研究する上で客観性を欠いてしまうことが懸念される。

附『阿弥陀経要記』逸文補遺

【凡例】

❶散逸文献である永観撰『阿弥陀経要記』一巻について、「先行逸文」をもとに増補し、経文の順に従って整理した。

❷本文に用いた記号が示す意味は次の通りである。

《》…『阿弥陀経』所釈文、（）…逸文の所在、※…当該逸文が逸文に類するものであることを表す、〔〕…原文での割註・細字、□…湮滅、SK…直後の漢字に対する左訓、■（白抜きローマ数字）…逸文の範囲

❸逸文を有する文献名は次の記号で表記した。なお、Ⓜ・Ⓣは龍谷大学大宮図書館蔵本を利用した。

Ⓐ 長西『法事讃疑芥』四巻[2]
Ⓑ 空寂『法事讃要略記』二巻
Ⓒ 道教『法事讃見聞集』（推定）甲・乙[3]
Ⓓ 良忠『選択伝弘決疑鈔』五巻（浄全七）［末木・新井B］
Ⓔ 道忠『群疑論探要記』一四巻（浄全六）［末木・新井C］
Ⓕ 良忠『法事讃私記』三巻（浄全四）［末木・新井A］
Ⓖ 良忠『往生要集義記』八巻（浄全一五）
Ⓗ 良忠『浄土宗要集』五巻（浄全一一）［新井M］
Ⓘ 道光『往生拾因私記』三巻（浄全一五）［末木・新井D］
Ⓙ 道光『大経抄』七巻（浄全一四）
Ⓚ 持阿『選択決疑抄見聞』一〇巻（浄全七）
Ⓛ 聖冏『浄土述聞口決鈔』二巻（浄全一一）
Ⓜ 莽慧『阿弥陀経私集抄』三巻（享保二年刊）［末木・新井E］
Ⓝ 聖冏『二蔵義見聞』八巻（浄全一二）
Ⓞ 聖冏『伝通記糅鈔』四八巻（浄全三）［新井G］
Ⓟ 聖冏『決疑砂直牒』一〇巻（浄全七）［末木・新井F］
Ⓠ 良栄『東宗要見聞』一〇巻（浄全一一）
Ⓡ 聖聡『小経直談要註記』八巻（浄全二二）［末木G、新井H］
Ⓢ 加祐『法事讃私記抄』三巻（浄全四）［末木H、新井I］
Ⓣ 恵空『阿弥陀経義要』四巻（宝永八年刊）［末木I］
Ⓤ 義山『阿弥陀経随聞講録』一巻（浄全一四）［末木J、新井J］

*1 神奈川県立金沢文庫蔵書写本（【請求番号】九四―四―一～四）。
*2 神奈川県立金沢文庫蔵書写本（【請求番号】九三―三―一～二）。なお、撰者である入阿について、塚本善隆博士は鎮西義の敬蓮社入阿（一二〇三―一二八五）と考えられていたが（『金沢文庫所蔵 浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本』、『浄土学』（復刻版）巻二［一九八〇年、初出は一九三三年］）、坪井俊映博士によって内容面より諸行本願義に属する入阿空寂のことであると論証された（『金沢文庫蔵 観経疏顕意抄著者入阿について』、『金沢文庫研究』巻六四［一九五八年］）。
*3 神奈川県立金沢文庫蔵書写本断簡（【請求番号】七五―六―一［甲］・二［乙］）。

Ⓥ 慧雲『阿弥陀経甲午記』二巻（真全六）［末木K、新井K］
Ⓦ 法海『阿弥陀経丁亥録』五巻（真大四）［末木L］
Ⓧ 月珠『阿弥陀経松江録』一巻（真全六）［新井L］

なお、以下の江戸期文献からも逸文を検出したが、既存の逸文と重複するため採用しなかった。

・恵空『選択集叢林記』八巻…三文（真全一七500b501a、508b、509a）
・慶秀『持名鈔私記』二巻…一文（真大二八170b171a）

❹（）内の見方は、文献記号 → 逸文所有巻数 → 収録本頁数 → 段数の順で示した。例えば「Ⓡ一308a」とあるのは、『小経直談要註記』巻一、『浄全』三〇八頁下段の意。また、「先行逸文」以降、新たに検出された逸文には「㽞」を付した。

❺本文は、旧字を新字に、異体字を通行体にそれぞれ直し、適宜句読点を付した。また、返点・送り仮名は本文として採用した典籍に付されたものをそのまま記したが、「冫」「冂」「也」等の略字は表記を改め、合符は採用しなかった。

❻一つの逸文が複数の文献に確認できた場合、（）内の冒頭のものから本文を採用したが、原則として時代の古いものを重視した。ただし、一つの逸文において、古いものが逸文の一部しか有していない場合、一番多くの逸文分量を持つ文献を優先して本文とした。また、㊸は諸文献が断片的に逸文を有している都合上、複数の文献に見られる逸文を統合して一文とした。

❼一つの逸文が複数の文献に確認できた場合、『要記』の本文に限り本文に採用した以外の他本で対校した。なお、「永観与之全同」などの逸文に類するものは、同内容が複数の文献に見られたとしても対校しなかった。

❽対校にあたっては、「無」「无」などの異体字の相異、「アミタ」「阿弥陀」などの漢字カナの相異は対校しなかった。また、「々」（同字）は前の文字と異なる場合のみ対校した。

❾対校で用いた記号が示す意味は次の通りである。

㈠ 記号
↓…翻刻した本文と対校本との相異を表す、〔 〕…文言の付加を表す

㈡ 用語
無し…見出し語の文言が無いことを表す、註記…本文に対して記された註を表す

❿対校本が、和語あるいは著しい取意の文であった場合、対校しなかった。

⓫逸文補遺は、基本的に「先行逸文」に加上する形で行ったが、出拠は一々確認し、頁数等に誤りがあれば訂正した。また、「先行逸文」が挙げる出拠のうち、採用しなかったものがある。番号と不採用の理由を以下に示す。

※㉞Ⓢ中191…末木博士は挙げるが、解釈論であり引文ではないため。
※㊳Ⓢ下202…末木博士は挙げるが、『法事讃私記』の註釈であり引文ではないため。
※㊳Ⓤ738…末木博士は挙げるが、「已上禅林要記取意」と割註があって文言が大きく異なるため。
※㊺Ⓢ下213…末木博士は挙げるが、所釈であり引文ではないため。
※新井氏は㊹四82「要記云戒定慧三学各有貪慢二虫〈云云〉」（七一頁）を逸文として挙げるが、当文は直前に「持犯」とあり、元暁撰『菩薩戒本持犯要記』（『大正蔵』巻四五・九一八―九一九頁）の取意文と考えられるため。

【逸文補遺】

①《題号（仏説阿弥陀経）》

永観アミタ経要記云、弁題目者、梵云仏陀槃遮アミタ修多羅、此云覚説無量寿経。今梵漢並存故、云仏説アミタ経〈文〉。　（Ⓐ二3左、㊞）

②《同》

※仏説アミタ経義疏云〈并序〉、西湖霊芝崇福寺釈〈元照述〉。一乗極唱終帰、咸指於楽邦。万行円修最勝、独SヲスK推、於果SスK号。良以従因建願SヒマK康、志躬行、歴塵点劫、懐済衆之仁。无芥子地、非捨身之処、次正釈文□又二。初釈経題、二釈経文。初中此本名称讃不可思議功徳一切諸仏所護念。総十六字経字為通題、上十五字為別題。上八字属教。即経所説依正荘厳、称名往生、皆是ミタ修因感果威神願力不思議功徳也。下七字属機。即依教起行専修成業、衆聖冥加摂持、不退直至菩提也。奘師唐訳即用本題、云称讃浄土仏摂受経。語雖少異、義意大同。対之可見。今経秦訳隠略本題。在六方仏後、即下云汝等衆生当信是等、拠宗取要、別建此題、略有五意。一則上符経旨。経中唯示持名方法、故取仏名、用標題首。二則下適機宜、ミタ名号衆所楽聞故用標題、必多信受故。三理自包含、但標仏名、称讃護念任運自摂故。四義存、便易梵号兼含、耳聞淳熟故。五語従簡要、後世受持称道不繁、故〈文〉。〈源信永観与之全同〉。　（Ⓐ二6右左、㊞）

③《分科》

※台云、自如是我聞至諸天大衆俱、序分也。自爾時仏告至是為甚難正宗分、自仏説此経已訖経流通分也〈取意〉。照云、次釈経文、大分三分。初至大衆俱為序分、二爾時仏告下至是為甚難為正宗分、三仏説此経下至末文流通分〈文〉。暁、測、照、信、観、皆如天台。

（Ⓐ二7右、Ⓔ中53b、Ⓡ1308a、Ⓣ上本22右、Ⓤ710b）

④《同》

但永観要記云、此経有証信无発起。若依浄影意、以一時已下可云発起序〈取意〉。　（Ⓐ二8左、㊞）

⑤《序分、無問自説》

観云、法花経□、无有人請而自説者、猶示如来大悲能至、機動即説不待他請。肇云、真友不待□如慈母之於超嬰児〈以上〉。

（Ⓐ三5右左、Ⓜ上6左、Ⓣ上本23左）

⑥《舎衛国》

観云、金剛疏云、真諦云、彼国正音、応云奢羅摩羅死底。此云好名聞国。昔有仙人有好名聞、国以名也〈文〉。旧翻為聞物国。遠聞諸国故〈文〉。　（Ⓐ二9右、㊞）

⑦《祇樹給孤独園》

観云、又涅槃経云、祇陀長者自造門楼、須達長者七日之中成立大房、足三百間禅坊静処六十三所冬屋夏宮各々別異、厨坊泥室洗脚之処、大小清廁无不備足〈已上〉。在此勝処説故可取也〈文〉。　（Ⓐ二10右、㊞）

⑧《長老》

観云、内秘菩薩外現声聞位、高可崇故呼為長老也。又云、摂大乗論明身子是化〈已上〉。　（Ⓐ二11左、㊞）

⑨《羅睺羅》

永観、羅睺羅者、此云覆障。三蔵云、本是阿修羅名。若具翻之、応云障月仏子、又云宮生〈略抄〉〈文〉。　（Ⓐ二18右、㊞）

⑩《賓頭盧頗羅堕》

観云、賓頭盧頗羅堕者、性頗羅堕俗也。真諦三蔵云、翻為利根仙人、六性波羅門中一性也〈已上〉。　（Ⓐ二19右20左、㊞）

⑪《迦留陀夷》

観云、迦留陀夷者、迦留此翻時、陀夷名之為起。十八部疏云、迦留者累、陀夷者上。謂悉達太子宮時師也〈文〉。　（Ⓐ二20左、㊞）

⑫《阿嵐楼駄》

①処　Ⓐ下に中略符号あり　②経□→Ⓜ㊀疏云　③猶→Ⓜ㊀謂　④肇→Ⓜ㊀肇〔公〕　⑤□→Ⓜ㊀請　⑥超→Ⓜ㊀赴　⑦宮　Ⓐ「堂」と右傍註記

観云、阿鳩楼駄者、此翻為如意、亦云无貧。西明疏亦加二人。謂椶阿迦与難達羅難□阿也〈文〉。　（Ⓐ二22右左、圏）

⑬《常精進菩薩》

観云、以衆生常有諸苦、是故大士恒順済拔。故言常精進〈文〉。　（Ⓐ二24右、Ⓕ中59b60a、Ⓡ二331a）

⑭《仏告舎利弗》

永観云、問云、何故不告菩薩。釈言、小乗之人不許有他方仏。今嘆陳之。是故告之。〈已上〉　（Ⓜ上18右左、Ⓣ上末1右）

⑮《過十方億仏土》

智光往生論疏云、言俱胝者此為億也。那由他者当此間数数也。世俗言十千曰万十万曰億十億曰地十地曰経十経為欠。欠猶是大数也。百千俱胝即十万億。億有四億。一者十万。二者百万。三千万。四者万万也。今億者即是万万也。為顕此義挙那庾多〈已上〉。永観要記在之。　（Ⓜ上19右）

⑯《其国衆生無有衆苦》

永観要記云、胎経言、蓮花生者非胎卵化湿之生。悲花言、化言不同化生。又彼衆生相好端厳常不老故無老苦。四大調和故無外病。三毒不発故無内病。寿命無量Sコトサラk故無死苦。俱会一処故無愛別離苦。正道大慈悲故無怨憎会苦。外受五妙楽内饒七聖財。行則金蓮捧之。坐則宝坐承躯。出則帝釈在前。入則梵王従後。味則百味希饍。服則名衣上服。相則三十二相。寿即無量寿命。階位自然進。行願念念増。不如此界貪著追求。現受衆苦。故無求不得苦。又以浄土之五陰故無五陰盛苦。彼土諸天功徳荘厳日日増盛故無五衰苦。禅定智恵時時増進故無退没苦〈已上〉。　（Ⓜ上21右左、Ⓣ上末7右左）

⑰《七重欄楯》

永観要記云、七重欄楯者此即地荘厳。故論云、荘厳地者、偈言宮殿諸楼閣観十方無导雑樹異光色宝欄遍囲繞〈已上〉。　（Ⓒ乙5右、圏）

⑱《七重羅網》

永観要記云、七重羅網者此即空荘厳也。故論云荘厳虚空者偈言無量宝交絡羅網遍虚空種々鈴発響宣吐妙法音〈已上〉。　（Ⓒ乙5右、圏）

⑲《七重行樹皆是四宝》

同要記云、七重行樹者十六観中第四観也。若欲広観可読観経〈乃至〉四宝者准下讃道是金銀瑪瑙頗梨也。称讃云、四宝荘厳金宝銀宝吠琉璃宝、頗胝迦宝妙飾間綺〈已上〉。　（Ⓒ乙5右左、圏）

⑳《七宝池》

永観挙略記義云、今云、思益経文等未必可証。由此可謂。観経為初心行者。水想観次説瑠璃地。見氷映徹作瑠璃相。観門其便。理実彼土七宝為地。故花坐観並双観経七宝為地。但今経説黄金為地。且挙勝耳〈已上〉。　（Ⓜ中2右、Ⓣ上末15右）

㉑《同》

※信云、問。観経云瑠璃地、何故今云黄金。解曰、思益説未来須弥灯王仏国土、云閻浮金瑠璃為地。准彼思之、黄金不映徹。瑠璃非金色、彼土金色亦応映徹。故俱得□。又観経云瑠璃地上以黄金縄雑厠間錯〈云云〉。二宝合成故亦俱名。私云、大経上云、七宝合成為地〈文〉。可合□也。永観難恵心之義也。　（Ⓐ三10右左、圏）

㉒《同》

或言、七中挙勝〈永観〉。　（Ⓥ上135b）

㉓《上有楼閣》

要記云、問云、何故宝池中忽説楼閣。釈言、有以渡於階道至于楼閣。故従便説、或彼楼閣多在島中。是故清浄覚経等説処処有浴池邊仏講堂、或邊羅漢菩薩講堂。故知楼在宝池〈已上〉。　（Ⓜ上24右、Ⓣ上末11右）

①順→Ⓕ Ⓡ須　②進→Ⓕ Ⓡ進〔也〕　③言→Ⓣ云　④之→Ⓣ足　⑤相→Ⓣ想
⑥其→Ⓣ甚　⑦坐→Ⓣ座　⑧観→Ⓣ巻　⑨島→Ⓣ嶋

㉔《大如車輪》
又永観要記云、大如車輪、一相伝云、大者形也、以方円等是形也」故〈已上〉。（Ⓒ乙6左、圏）

㉕《雨曼陀羅華》
観云、法花疏云曼陀羅花者何。西明云天花名也。中国亦有之、其似赤而黄如青而紫如銀而紅〈已上〉。■問。称讃経説常①雨種々上妙天花、今何唯②言曼陀③羅。④今説一花是即略也。理実彼土可雨衆花故〈文〉。■次文云盛衆妙花〈已上〉。（～■Ⓐ三11右、含圏、■～Ⓜ中3左、■～Ⓣ上末18右）

㉖《衣裓》
要記云、法花疏云、衣裓者、一義衣裣也。又天台云、衣①裓是②盛器。形如」函蓋」而有」二足」。手擎供養〈已上〉。（Ⓜ中3左4右、Ⓣ上末18左）

㉗《舎利》
観云、有疏云、舎利者此云鸚鵡①鳥、光記云、舎利鳥者舌身也。有云、□利鳥者鶯也〈文〉。（Ⓐ三13右左、圏）

㉘《迦陵頻伽》
※一云、迦陵頻伽者発妙音鳥、如余処説仏以伽陵頻伽音為衆演説。譬喩経中、阿育王問波斯匿王妹尼云、仏有八種音声以何為喩。道人曰、仏音厳妙无双无比。唯今海辺有鳥、名為羯随。其頗有髣髴王即還曰、使人求之未復、得鳥旬日不鳴。王甚恠之時、有青衣荘厳以大鏡者、鳥若於鳥見鏡中、影驚欣歓鳴。青衣旋之不得令鳥青衣、皇我能令鳥鳴。王言、汝能使鳥鳴、勉汝為夫人。即取大鏡懸之四面、鳥在中央四句見伴即使悲鳴。声甚哀和□□分之一。王意歓喜即発无上正真。宮中綵女凡千人亦発无上道意、従意従分遂信三宝。鳥之音声所発如是覽。於其真清浄妙音者乎。案曰、伽陵頻伽即名羯随〈文〉。照与観意同之。（Ⓐ三13左、圏）

㉙《五根～八聖道分》
永観要記云、言五根、謂信精進念定恵也。初従出生善根」名根」。後従難可魔伏」名力」。七菩提分者、謂択法、進喜、念、定、捨、軽安〈菩提」此云覚分者支□〉八聖道分者、謂正見」正思惟」正語」正業」正命」正定」正精進」也〈已上〉。（Ⓒ乙7左、圏）

㉚《是諸衆鳥～変化所作》
観云、□故不説四念住等。有疏釈云、彼化生身然无体不浄等故、而不倒執浄不浄心故、不説身念。雖无苦受亦不楽執心到、不説念受。知心无常励誠修道、不説念心。知法无我无我倒、不説念法〈是故不説四念〉。不曾造悪、无煩悩、説断熾然、自励諸聖道、不仮説修故〈不説四勤〉。定慧兼修、非恒散乱、五通報得、无労如意。是故前三鳥音不説、又略挙非鳥不宣〈已上〉。（Ⓐ三14右、圏）

㉛《同》
※恩云、智度論問云、浄土中諸仏有无量神力」。何不但多化作仏処々説法、度衆生乃化作畜生、皆現樹木等説法也。答。若処々仏身衆生即不能信。謂為幻化也。心不敬重於道難入。所以不化作仏。又如本生経説。若菩薩作畜生身為人説法、人以希有故聞皆信受、又以畜生心真故不誑人聞則生信。又恐有情衆生、是欺誑故亦令无情、樹木而演諸法聞即□受〈文〉。攝与観同之。（Ⓐ三14左15右、圏）

㉜《彼仏光明無量》
観云、問曰、諸仏功徳斉等、何故ミタ光明殊勝。釈言、法報功徳斉等、但化身仏多依本願有差別、以本願故此仏光勝。故願云、設我得仏、光明有能限①量、不取正覚〈文〉。（Ⓐ三16右、圏）

㉝《彼仏寿命及其人民無量無辺》
永観要記云、西明云、此即総釈寿命億衆无量〈已上〉。（Ⓒ甲1左、圏）

㉞《成仏已来於今十劫》
禅林要記云、舎利弗阿弥陀下、次明」成道」。此文来」者通」衆疑」也。疑云、彼仏寿命雖」無量劫」応」有」尽期」。若爾恐臨」滅度後」。為」通」此疑」明」

①雨→Ⓜⓣ両　②言→Ⓜ言〔両〕→ⓣ両　③羅→Ⓜⓣ羅〔花〕　④今→ⓣ〔答〕今　⑤裓→ⓣ裓〔者〕　⑥盛→ⓣ盛〔花〕　⑦鳥　Ⓐ下に中略符号あり　⑧量　Ⓐ下に中略符号あり

成道近、即顕、未来化用一也〈已上〉。　（Ⓟ六537b）

㉟《同》

又要記云、今称讃経云十大劫、双巻経云凡歴十劫、大阿弥陀経云十小劫、平等覚経云十八劫。然有大小不同者、宝崛云、如雑心説、六十四劫名一大劫。倶舎云、八十小劫為一大劫。依瓔珞経下巻、亦明三劫。一一里二里十里乃至四十里石、方広亦然。以天衣重三銖、人中日月歳数三年一払、此石乃尽、名一小劫。就小劫中、自有一里二里乃至四十里也。二八十里石、方広亦然。以梵天衣重三銖、梵天中百宝光明鏡為日月歳数三年一払、此石乃尽、名為中劫。三有八百里石、方広亦然。以浄居天衣重三銖、即浄居天百宝光明鏡為日月歳数三年一払、此石乃尽、名一大僧祇劫。智度論、摂論等云、〈乃至〉四十里城満中芥子、不概令平、百歳人取一芥子、尽、名一大劫。望瓔珞経、即是彼小劫〈略抄〉。説大小劫得名不定、望大名小、望小名大。〈已上要記〉。　（Ⓓ五140a、㊟）

㊱《於今十劫》

要記云、聖主弥陀、十劫已来恒流正法。我等由障、今日始聞、五内悲傷、特生恥恨。誰有々智者、今生不　励往生之事。噫撫胸恥懺、誰不為指南。　（Ⓑ下18左、㊟）

㊲《成仏已来於今十劫》

※慈恩、永観為十劫歟。　（Ⓐ三17左、㊟）

㊳《其中多有一生補処》

永観要記云、問①曰、彼土一生補処、若准此方為取无生。釈言、彼土非先処天、次②必成仏。今一生者、十地究竟③云一生也〈已上〉。　（Ⓒ甲3右、Ⓜ中19右、Ⓣ下本14右）

㊴《衆生聞者応当発願生彼国土》

是故要記云、実雖大菩提心浄土正因、末代遇夫輒以難発。縦雖希発、遇縁使退、故仏願説浄土荘厳、Sシメテ令彼一願楽生大乗土発菩提心。若不爾者、何得発心。豈不如来大悲願力。斯実発心之方便、末代之要行也〈云々〉。　（Ⓑ下21右、㊟）

㊵《若一日七日》

観云、問曰、今説七日之行為近臨終為通尋常、釈有両解。一云唯④近行、故感禅師云、観⑤経臨⑥終者極少一念十念亦得往生。アミタ経対有命未尽経日始⑦已、或⑧一二日乃至経於多日能念仏名亦生浄土。无量寿経対長寿不死之者尽形寿一⑨向専念⑩方得往生〈⑪已上〉。⑫亦通尋常、■問⑬曰、若言通尋常者、七日之後遇縁作悪、豈得往生。如遺教経云、瞋恚之害⑭破善法、又劫功徳賊无過瞋恚。釈言、不爾。■七日行後、設雖造罪而⑮此行法決定業故、是⑯人終⑰時不顛⑱倒、懺⑲悔罪必得往生。或七日後、不遇悪縁⑳以是大善威㉑徳力、㉒一切諸仏所護念故、■此解為勝。不爾便有尋常行中无定業過〈文〉。（Ⓐ三23右、Ⓟ下76b、Ⓘ上613a、Ⓡ七396a、～■Ⓒ甲五右、■～■Ⓓ五333a、Ⓣ下本32左）

㊶《一心不乱》

明知、弥陀名号之中即含蔵、無辺功徳。故、一心称念、成大善根、必得往生。如要記云。諸仏願行、成此果名。但能念号、具蒙衆徳。故成大善、不癈往生。　（Ⓑ下21左、㊟）

㊷《臨命終時阿弥陀仏与諸聖衆現在其前》

要記云、彼見聖衆来歓喜勇猛。住喜受心、不待捨受、忽捨身命。是故経説、命欲終時、不説命終。■彼懐玉禅師、含咲而終教信髑髏眼口似咲、若非喜受彼何㉓爾耶〈已上〉。　（Ⓔ一〇427a、■～Ⓖ三218b、含㊟）

㊸《我見是利以下》

※亦下引略記云、経曰、舎利至生彼国土下第二引証勧成〈乃至〉故以証勧。此有五文。一以自証知見勧。二引他方仏説勧。三示現当利益勧。四挙我為仏讃勧。五惣結勧進。此是初也。意云我以仏眼観明見此勝利。故説彼因果。汝等勿有疑〈禅林同之〉。　（Ⓢ下204b）

①曰→Ⓜ㊟云　②必→Ⓜ㊟如　③云→Ⓜ㊟之　④近→ⓒⓕⓛ近〔終〕→Ⓡ近〔臨終〕　⑤経→ⓒⓕⓛⓡ経〔対〕　⑥終→ⓕⓛ終〔之〕　⑦已→ⓛⓡ亡　⑧一→ⓕⓛⓡ一〔日〕　⑨向→ⓛ心　⑩方→ⓛ当　⑪已上　ⓛⓡに無し　⑫亦→ⓒⓕⓛⓡ〔二云〕亦　⑬日→Ⓡ云　⑭破→ⓕⓛⓡ破〔諸〕　⑮此→㊟斯　⑯人→㊟人〔臨〕　⑰時→ⓓⓕⓛⓡ時〔心〕　⑱倒→㊟例　⑲悔→ⓓⓕⓛⓡ㊟悔〔滅〕　⑳以是→㊟是以　㉑徳→ⓛ徳〔之〕　㉒一→ⓓⓕ㊟〔故〕一　㉓爾

㊹《同》

観云、明往生証此文来者、為断疑生信仏証誠之。於中有二。一明自証、二明他証〈文〉。（Ⓐ三24右、Ⓕ下78ab、Ⓜ下9右、Ⓡ七401a、Ⓣ下本42右）

㊺《若有衆生聞是説者応当発願生彼国土》

観云、若有衆生等、次勧願因。■唯勧①願、挙初略後具足、応云願行俱勧。■故称讃云、一切皆応②住意発願、如説修行生彼仏土〈文〉。（Ⓐ三24右左、含圖、■～Ⓑ下24右、■～■Ⓣ下本42左）

㊻《同》

故永観要記云、第二正勧願〈乃至〉故大経説三輩之人発菩提心〈已上〉。（Ⓒ甲3右、圖）

㊼《各於其国〈六方諸仏〉》

又永観要記云、各於其国者、第四明国土。■称讃経③云、住在④各⑤方自仏浄土〈已上〉。（Ⓒ甲7右、含圖、■～Ⓐ四1右、Ⓕ下80a、Ⓡ八402a、Ⓣ下末2左）

㊽《出広長舌相》

観云、明⑥化証。是冊八願中第十七願也。■此有二師。一云引例証、謂非我嘆彼仏依正勧物往生、亦六方諸仏皆悉勧発称揚讃歎、各従其土往生彼国。若爾何故現広長舌当信此経。豈非現瑞。釈言諸仏各於其土説此経時、現瑞説法何有不可。二云現瑞証、■謂十方仏恐畏衆生不信釈迦一仏所説、即共同心同時各出舌相、⑦遍覆三千世界⑧証誠実言、汝等衆⑨生応信受釈迦所⑩説。■若⑪爾■此会大衆見聞彼事、⑫是義難知。今試釈之、■発記影⑬向⑭必応見聞、当機結縁随宜不定。■或仏神力故四衆俱⑮見。（Ⓐ四2左3右、含圖、■～Ⓣ上410b411a、■～Ⓑ下26右、Ⓡ五914b、■～Ⓕ下81b、Ⓡ八403a、Ⓣ下末9左、■～Ⓒ甲7左、Ⓦ五318b、■～■Ⓕ242a、Ⓤ748a）

㊾《同》

観云、問曰、⑯諸皆現舌相讃ミタ徳、何故釈迦不現此相。是義難解。但現瑞説法多随機宜耳、何必一切皆悉斉等現。復此経略去別序、瑞相有无暗以難知。（Ⓐ四4右、Ⓒ甲7右、圖）

㊿《同》

※散善義云、又十方仏等、恐衆生不信釈迦一仏説、共同心同時舌相遍覆三千、応信是釈迦所説所讃所証〈文〉。〈永観如成之〉。（Ⓐ四5右、圖）

51《汝等衆生》

観云、汝等衆生等者、第七明勧進。若爾此文為彼仏勧。為此仏勧、称讃経云、及十方面諸仏世尊為欲方便利益安楽諸有情。故各住本土現大神変発誠諸言、勧諸有情信受此法〈已上〉。天台云、六方諸仏皆悉勧発称揚讃嘆。恒河沙数仏各於其土往生彼国〈已上〉。明知、此文彼仏勧進。有云、此文未必指一々方勧信文、義記亦爾。故六文是今仏観。今云、若非指一々方、何云六方。義記釈炳然、勿曲会私情見。（Ⓐ四4左、圖）

52《一切諸仏所護念経》

又永観要記云、金剛疏云、問。諸仏護念有何利益。答。猶□魚子母念、即成不念即壊。菩薩亦爾〈已上〉。（Ⓒ甲10左、圖）

53《西方世界有無量寿仏》

禅林疏云、問曰、无量寿者、為今所説極楽化主。■有云、■多有同名阿弥陀仏〈文〉。■今云、是義難知。設雖化主証明、何失。■為引衆生称揚自徳、諸仏常途也。■而弥陀自証明、何非便乎。■乃至引通讃。釈迦自讃散在諸経。於今経、釈迦説行能難事得菩提明此浄土法門諸仏称讃。是豈非釈迦自説哉。為利生故何成失。弥陀自証例而可知。（～Ⓐ四7右、圖、■～Ⓕ下83a、Ⓡ八405a、■～■Ⓑ下27左、■～Ⓣ下末15右、■～Ⓜ下16右、Ⓧ181b）

54《無量寿仏》

※通賛巻二、若弥陀自讃、猶理何違。引転衆生令生勝意〈已上〉。〈永観意同之〉（Ⓒ甲8ウ、圖）

55《無量寿仏》

耶　Ⓒに無し
①願→Ⓑ①願〔者〕　②住意→Ⓑ信受　③云→Ⓣ言　④各方→ⒻⒹ本土　⑤方　Ⓐ「十」と右傍註記　⑥化　Ⓐ「他」と右傍註記　⑦遍→Ⓚ徧　⑧証→ⒷⒾⓀ

説　⑨生→ⒷⒾⓀ生〔皆〕　⑩説→Ⓑ説〔□所讃所証〕→①〔所讃所証〕→Ⓚ説〔所証〕　⑪爾　Ⓚに無し　⑫「是…或」二五字　Ⓑに無し　⑬向→Ⓕ響→ⒻⓊ嚮　⑭必応見聞→ⒻⓊ二衆見彼土舌相　⑮見→Ⓚ見〔群疑論云観相聴言則此

本朝永観澄憲、同以智論弥陀云西方極楽教主〈云云〉。（Ⓞ九219a）

56《已発願》

観云、今由唯発願[15]□得生者、今文略也。故称讃云、如説行者、一切定於阿耨菩提得不退転、一切定生極楽世界〈已上〉。■又■摂論云、由唯発願[2]便得往生安楽[6]世界、是別時意〈[4]已上〉。若爾復由唯有行往生浄土、亦別時意〈已上〉。

（Ⓐ四6左、Ⓕ下85b、Ⓡ八409b、■～Ⓞ二三519a、～■Ⓐ二272a）

57《是諸善男子…三菩提》

観云、次勧願也。若爾由自願力亦可生余浄土。何故唯勧極楽。釈意極楽自他二願相応、謂自願為因仏願為縁、因縁和合。是故偏勧。於余仏土□□必然故々不勧進。（Ⓐ四11右、断）

58《称讃諸仏》

林云、問曰、前説釈迦唯讃ミタ功徳。今云、何言諸仏功徳。故称讃経云、称揚讃嘆无量寿仏。[15]涌[16]者不同伝親異。然什公善解泰言、如得経亘前後極楽依正功徳。是故唯是讃嘆ミタ。次六方段具説諸仏長舌瑞相、次復聞諸仏名得不退転。故此文云称讃諸仏、略本経文、豈是非功〈文〉。（Ⓐ四11左、断）

59《舎利弗当知〈分科〉～難信之法是為甚難》

禅林寺云、舎利弗当知下第四自結成述諸仏讃言遠結成往生願行也。■無数劫中仏出世難。設雖出世出悪世難。設出悪世説此法難。故云甚難。無量生中受人身難。設受人身値此経難。設値此経信心亦難。故云甚難。■称讃経云、若善男子善女人聞説如是極難信法能生信解如教修行当知。是人無量仏所曾種善根。是人命終定生極楽。（Ⓕ下87a、Ⓡ八411a、■～■Ⓑ下33右、Ⓤ756b757a）

60《五濁》

観云、言濁者是不情義、譬如濁水不知見物衆生心濁不見浄土故名濁也。法花玄云、所言五者煩悩與見此正是濁。此二所成名衆生濁。即此衆生連持之命名為命濁。此四種時謂劫濁也。問曰、何故五濁之中不説業濁。法花疏云、毘尼母経云、亦説業濁没於見濁、属煩悩濁。今明即衆生濁是業濁也。所以然者、既有煩悩起身口意悪業、故名業濁。何以知然。若但意地有諸煩悩不起身口業、非悪衆生、不□□生濁也。故知衆生濁即是業濁〈已上〉。（Ⓐ四12左、断）

61《難信之法》

※難信之法者、慈恩疏云、謂一日乃至七日念仏即抜玄沢高昇浄境。微因著果俗情難信。人恐如来引接語。故云難信之法〈已上〉。肇公、禅林同之。（Ⓕ下86b、Ⓡ八410a）

62《流通分〈分科〉》

観云、仏説此経已下大段流通分也。経宗所量文別有二。初明流通人无菩薩者、准前序分挙初後衆略去中人後明流通相。既信受聖分、豈不弘通乎。（Ⓐ四13右、断）

63《不明（唯除五逆誹謗正法）》

禅林要記云、感法師出十五家、一々不用而自釈。（Ⓔ六286a）

64《不明》

阿弥陀経要記〈今家〉云、又試釈云、有与奪二義。若与言之、本願中除十念以後造五逆者、一念悪心滅諸善故。観経中取造逆以後具十念者、一念能消億劫罪故依此義。故十念願通尋常臨終。若奪言之、本願中説欲生十念不説称名、下生中説称念仏名具足十念。所説既異、相違何失。設無造罪■欲生唯願無行豈生。欲生雖願数々念之行願具足。若契仏意願得往生。（①下461a、■～Ⓞ二三520a）

65《不明》

又永観弥陀経要記、[11]指第[12]十■四十六聞法随意願。■彼要記云、問曰、何以得知、弥陀説三乗法。答[13]云、大論云、諸仏初発心時見諸仏、

義也）　⑯諸→Ⓒ諸（仏）　⑰仏　Ⓜ Ⓣに無し　⑱引→Ⓑ Ⓡ利　⑲而　Ⓑに無し　⑳自　Ⓑに無し

①□→Ⓕ Ⓠ而　②便得　Ⓞに無し　③世界　Ⓞに無し　④已上　Ⓞに無し　⑤涌　Ⓐ「論歟」と右傍註記　⑥者　Ⓐ「説歟」と右傍註記　⑦甚難→Ⓑ難信　⑧行→Ⓑ受　⑨根→Ⓡ根（也）　⑩経　Ⓐ「論歟」と右傍註記　⑪指→Ⓞ云　⑫十　Ⓞに無し　⑬云→Ⓞ曰

以三三乗度衆生。自発願言、我亦当以三乗度衆生。■問㉓云、若依本願説三乗、何故四十八願之中不明説。答㉔云、第四十六願云、■設我得仏、国中菩薩随其志願所欲聞法自然得聞。若不爾者、不取正覚。問㉕云、彼説三乗者、何論云大乗善根界。答㉖云、彼土雖説小法而以彼不究竟。故言大乗善根界〈云云〉。

（Ⓠ二248b、含圏、■～■Ⓞ九219a、■～Ⓞ九219b、■～■Ⓝ八531a）

㊻《不明》

要記〈永観〉云、逆者十念不定可然。余者一念何為不定。是謬之謬〈已上〉。（Ⓒ八357b）

①生→Ⓞ生〔已上〕　②云→ⓄⓃ曰　③説→Ⓞ説〔耶〕→Ⓝ説〔乎〕　④云→ⓄⓃ曰　⑤云→Ⓞ曰　⑥云→Ⓞ曰　⑦究→Ⓞ説